Ⅳ．超未熟児の幼児期における家庭での母子関係
―母から子への態度（その２）、１年後の変化―

内　藤　達　男（国立小児病院新生児科）

昨年度，私共は，超未熟児（出生体重1,000g未満の未熟児）の生存例のうち，幼児期にある者が，家庭内でどのように養育されているかを，"母親の子どもに対する態度"という観点から，ある程度推測できないかと考え，若干の検討を加えた。その結果，傾向として，"厳格な"態度，または"溺愛"の態度と，一見矛盾するような態度の"偏り"が観察されたが，全般的には，"安全"あるいは安定した態度をとっていることを知った。

今回は，前年度と同じ対象について，"母親の子どもに対する態度"が1年後にどのように変化したかを調べてみたのでその結果を報告する。

対　　象

昭和５１年より昭和５５年の間に出生し，国立小児病院新生児科でtotal careされた，1,000g未満の超未熟児のうち，現在（昭和５８年1月）２才以上（２才２ヶ月～６才１０ヶ月，平均４才３ヶ月）（昨年度は，１才２ヶ月～５才９ヶ月，平均３才０ヶ月）の幼児期にある１２例の児それぞれの母親１１名（双生児１組を含む）を調査対象とした。なお，全盲（未熟児網膜症による），脳性麻痺，点頭てんかん等の重篤な後障害を有した児をもつ母親は除外した。

方　　法

前年度と同様，「田研・両親態度診断検査」(幼児用，母親用）（田中教育研究所編）を用い，"母親の子に対する態度"について調査した。すなわち，(1)消極拒否（不満），(2)積極拒否（非難），(3)厳格，(4)期待，(5)干渉，(6)不安（心配），(7)溺愛，(8)盲従，(9)矛盾，(10)不一致の１０項目について，それぞれ採点し，その点数を，診断グラフにプロットし，全体のグラフのひろがり，グラフの片寄り（偏り）などから，"母親の子どもに対する態度の"傾向"を判定した。そして，昨年度（昭和５７年１月調査）の結果と，本年度の結果（昭和５８年１月調査）を比較し，母親の態度が１年間でどのように変化したかを検討した。

結　　果

(1) 子どもの背景：１２例の出生時体重の平均は，８２８g（６８０～９００g），在胎週は平均26週（２５～２８週）であった。１２例のうち，５例が新生児集中治療を受けている。新生児病棟での入院期間は，８１日間から２２０日にも及び，平均１３０日（約４ヶ月）であった。１２例中，６例には同胞がいなかった。

(2) 精神運動発達：１２例中，７例の平均ＤＱは，１０２（６７～１１９）で，70以下が１例であった。また，４例の平均ＩＱは１０６（91～123）であった。

(3) 母親の年齢，および最終学歴：対象となった母親１１名の平均年齢は３５才（２４～４５才）であった。１１名中，９名が高校卒，２名が大学卒の最終学歴を有していた。

(4) 母親態度診断検査結果：

（母親の態度の１年後の変化）

(i)項目別の変化（質的変化）；消極拒否，厳格など，１０項目の態度別の１年後の変化を，危険地帯（危険圏）内に入っている項目の数でみると，"溺愛"，"矛盾"，"積極拒否"，"厳格"の数は，本年度はほとんど変化していないが，"干渉"，不安（心配）"が大幅に増加している。これは，"干渉"，"不安"の傾向（偏り）が出てきたことを示唆する。なお，"期待"，"盲従""不一致"の項は，昨年，本年とも危険圏内の数は皆無であった。

(ii)危険圏内および中間地帯（要注意圏）内の項目数の変化（量的変化）；昨年度は，危険圏内にある項目を１つでも有する者が１１例中5例(４５％）であったが，本年度は１２例中８例（６７%）であった。これらのうち，２項目以上が，危険圏内に入ったものは，昨年は３例（症例１～３）であったが，本年度は，５例（症例４，５，８，９，１０）（４１％）と増加していた。

ここで，試みに，対象を年齢別に，Ⅰ群（昭和５８年１月現在，４才以上，計７例）と，Ⅱ群(同３才以下，計５例）に別けて，危険地帯内に入った項目数と，中間地帯内にあった項目数，およびその両者の数について，１年間の変化を検討してみたところ，（表１）の如くであった。すなわち，危険圏内にある項目数は，Ⅰ群では，昨年度の平均1.1，本年度平均1.0と変化がないのに対し，Ⅱ群では，昨年の平均0.2から今年の平均1.8と大幅に増加していた。また，要注意圏の項目数の変化においては，Ⅰ群では，昨年の平均2.6から1.7へと減少しているのに対し，Ⅱ群では，反対に2.4から3.0と増加している。さらに，危険圏内および要注意圏内の項目の数を合した数についてみると，Ⅰ群では，昨年の平均3.7から，本年の2.7に減じているが，Ⅱ群では，逆に，平均2.5から4.2へと著しく増加していることが判明した。要するに，比較的年齢の高い群（Ⅰ群）では，１年後には，危険圏内や要注意圏内にある項目は減少し，逆に年齢が比較的低い群（Ⅱ群）では，これらが増加したことが判った。

次に，群別，項目別の変化を調べたところ，(表３）の如くであった。すなわち，Ⅰ群では，消極拒否，干渉の数が増加し，矛盾，不一致の数が減じている。これに対し，Ⅱ群では，干渉，不安，溺愛の傾向が増大している。

(iii)平均的態度の変化；群別にみると，（図１，２）の如く，平均的には，Ⅰ群は，昨年よりも今年の方がより“安全圏”内に入り，反対にⅡ群では，要注意圏や危険圏内の方向へと拡がりをみせていることが判る。１２例全体の平均点を，グラフにプロットしてみると，（図３）の如く，１年後には，“干渉”，“不安（心配）”，“溺愛”，が要注意圏内に入り，この方向への偏りが増大したことがわかる。しかし，全般的には，比較的“安全”と判定される。

考　　察

今回の調査目的は，すでに幼児期に達した超未熟児を養育している母親の，“子どもに対する態度”を，“１年間の変化”としてとらえることであった。その結果，いくつかの変化が認められた。全体的には，１年後には，母親の態度は，“干渉”“不安”，“溺愛”の傾向を若干増した。すなわち，子ども達の，平均３才３ヶ月から４才３ヶ月の１才という加齢に対して母親の態度が変化したわけである。この態度を便宜的に，４才以上と４才未満という２つの群に別けて比較した結果では，４才以上の比較的年齢の高い群では，この１年間で偏りの程度は減じているのに対し，比較的年齢の低い３才以下（主に２才代）の群では，その偏りが著しく増強していることが判明した。これをどのように解釈するか？

年齢の比較的高い群の変化は，子どもが４才以上になり，親自身，子どもが未熟児であったからという気持から解放され，普通の一人の幼児として見ることができるようになったために，いくらかの遅れや，反抗的なところなどが気になってくるのではないか？一方，比較的年齢の低い群では，１才代より２才代の１年間の変化が大きいことから，この時期が言葉の差，体つきの差などがはっきり出てくる時期でもあるので，発達のあせりから，“不満（消極拒否）”，“干渉”が増え，また外で遊ぶ機会も増加し，危険に対する心配の増大がみられるようになるのかもしれない。また，この時期は，未熟児であったということが通じなくなる時期でもある。

今回の結果は，単なる子どもの加齢にともなう母親の態度の変化としては，一般的なものなのか，あるいは超未熟児を養育している母親の特徴的な変化なのかは，今回の調査がcontrol stadyではなかったために，はっきりしない。どの子どもの母親でも，それぞれの子ども年齢によって，母親の養育態度は変化していくものであろうが，子どもが未熟児の場合，これらの変化が，より鮮明に特徴づけられる可能性はあると考えられる。今後，この点について更に検討する必要があろう。

結　　論

超未熟児で出生し，幼児期にある１２例の児（（平均年齢，４才３ヶ月）に対する母親の態度の，１年後（昨年度報告後）の変化を調べた結果，４才以上と４才未満の群では著しい差をみせたが，全体の平均的態度としては，“積極拒否”，“干渉”，“不安”の傾向が増し，“厳格”の傾向が減じたことが判った。

表1　危険地帯内の項目数および中間地帯内の項目数の変化

群＼項目・年次	①危険地帯内の項目数		②中間地帯内の項目数		①+②	
	昭和57年	昭和58年	昭和57年	昭和58年	昭和57年	昭和58年
I群(4才以上) N=7	8 (1.1)	7 (1.0)	18 (2.6)	12 (1.7)	26 (4.3)	13 (2.6)
II群(4才未満) N=5	1 (0.2)	9 (1.8)	12 (2.4)	15 (3.0)	13 (2.6)	24 (4.8)

( )内:平均の数

表2　群別の変化(内容別)

群	変化	①消極拒否	②積極拒否	③脅迫	④期待	⑤干渉	⑥不安	⑦溺愛	⑧盲従	⑨矛盾	⑩不一致	
I群(4才以上)(N=7)	増大	3	2	1	1	3		1		1		
	減少	1	1	1		1				2	2	
II群(4才未満)(N=5)	増大	1	2	1		5	4	4	2		1	
	減少						1	1	1	2		

増大：より傾向を強めたもの
減少：その傾向が改善されたもの

I群（4才以上）の変化

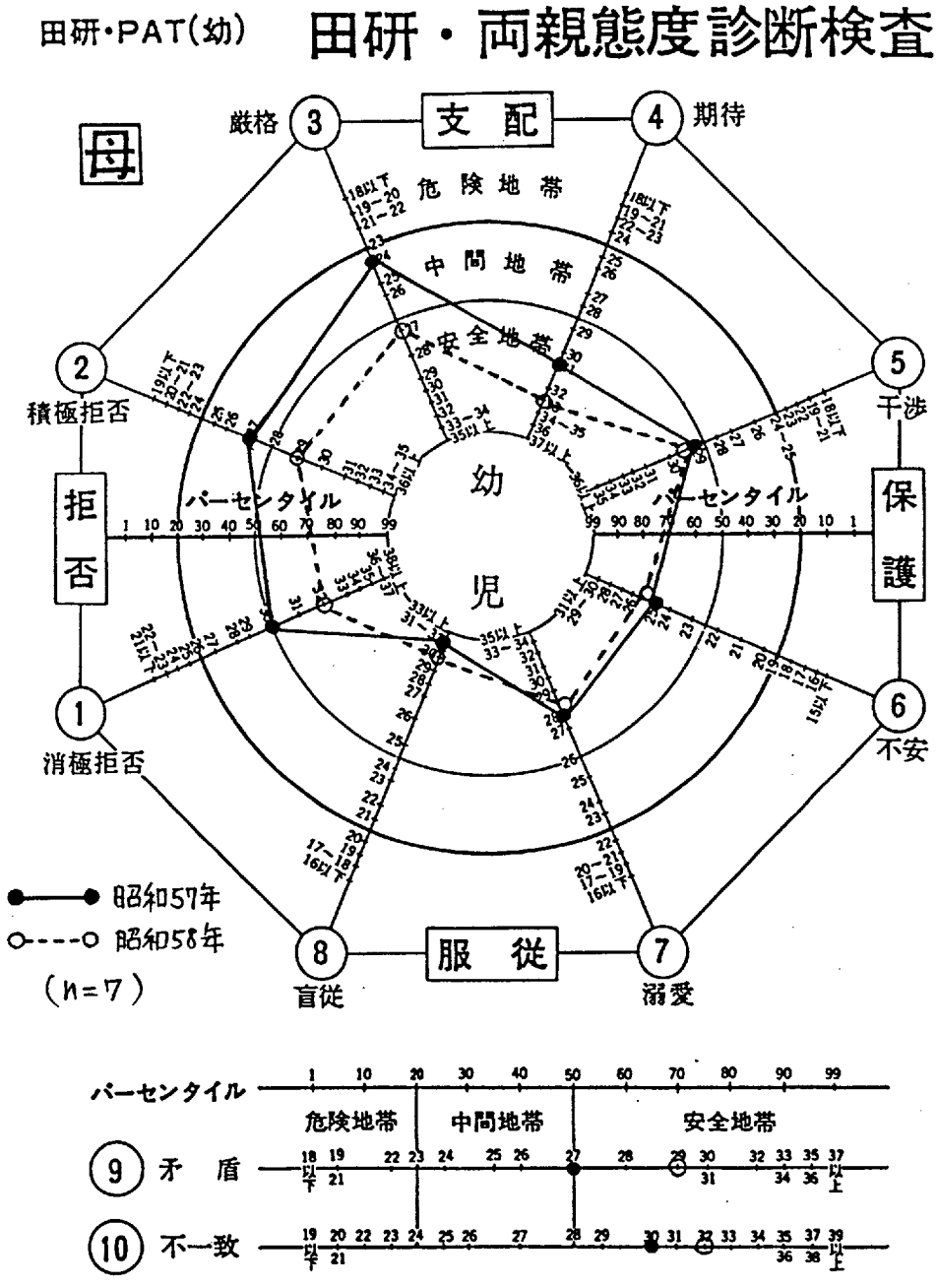


図1

Ⅱ群（4才未満）の変化

田研・PAT(幼)　**田研・両親態度診断検査**

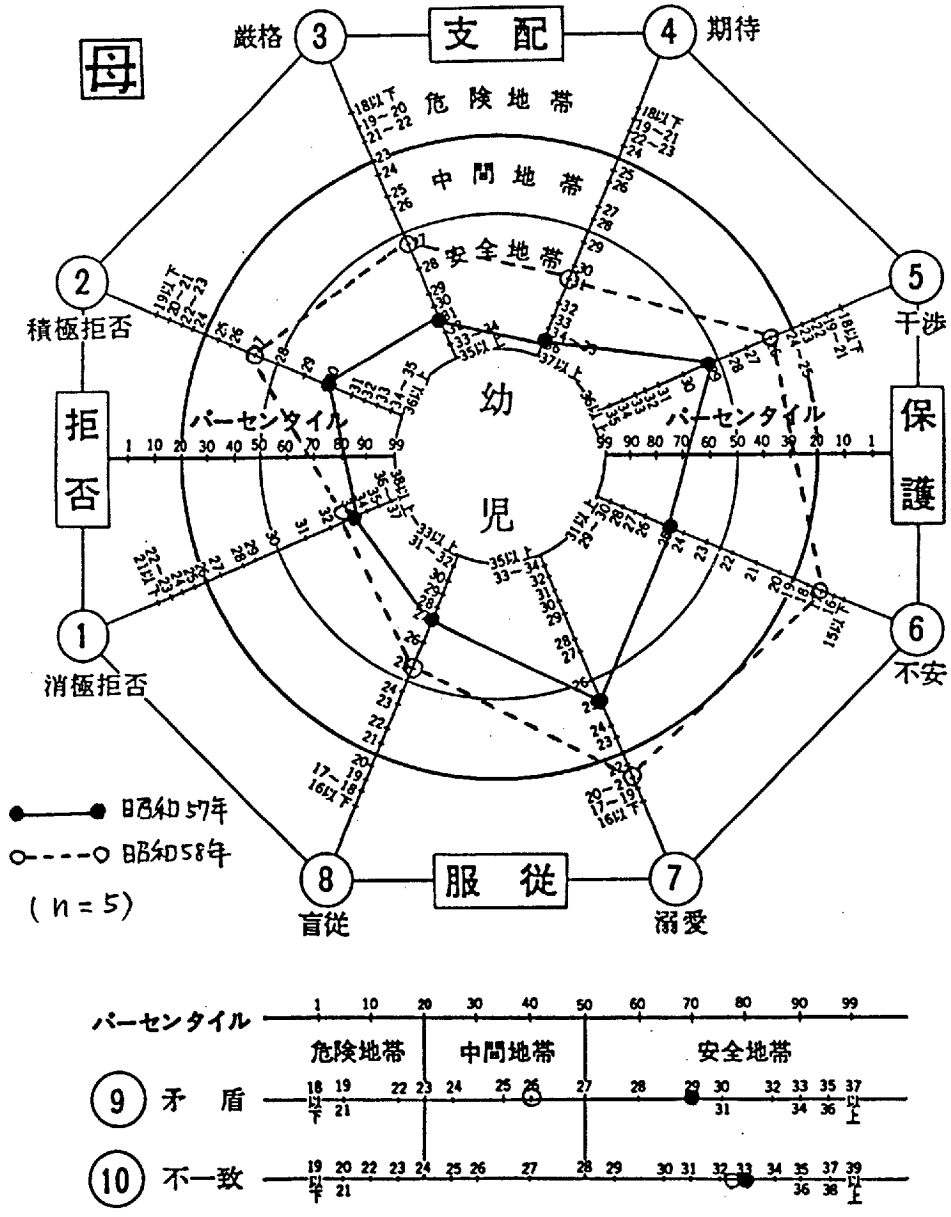
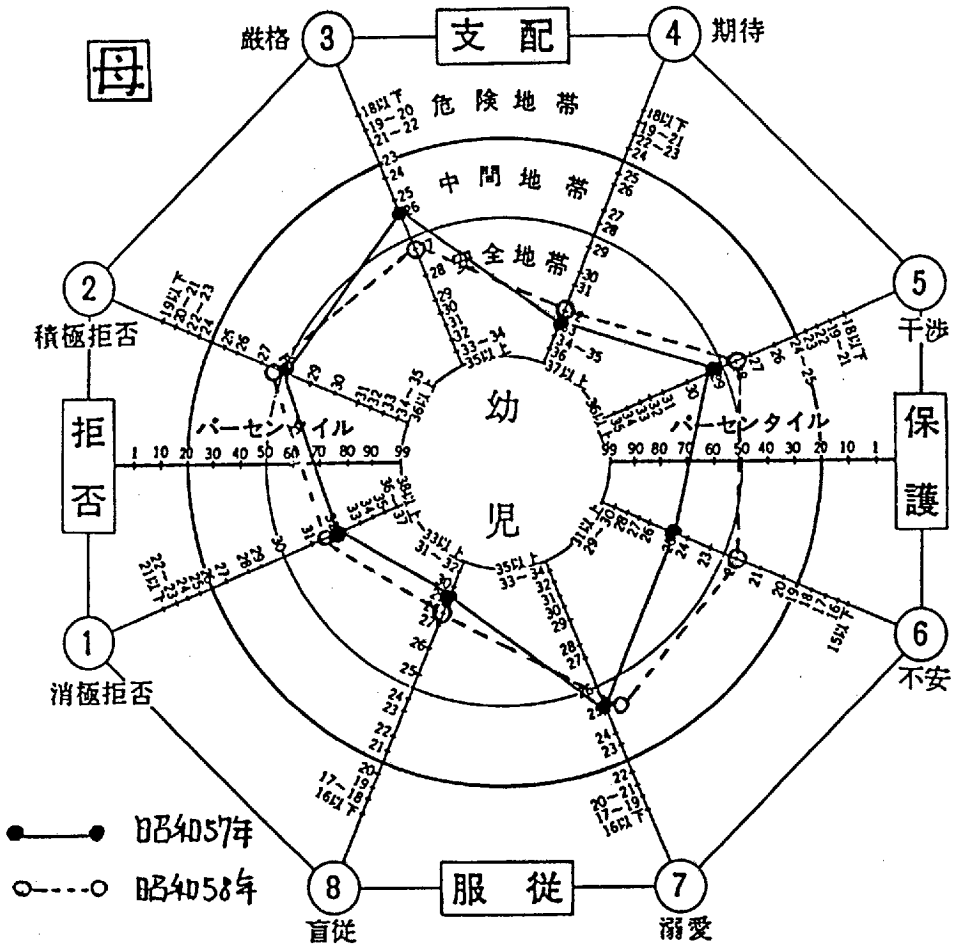


図2

12名の平均的態度の1年後の変化



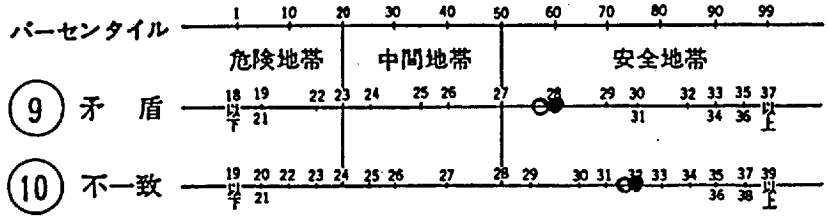


図3

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

昨年度,私共は,超未熟児(出生体重 1,000g 未満の未熟児)の生存例のうち,幼児期にある者が,家庭内でどのように養育されているかを,“ 母親の子どもに対する態度"という観点から,ある程度推測できないかと考え,若干の検討を加えた。その結果,傾向として, “ 厳格な"態度,または “ 溺愛"の態度と,一見矛盾するような態度の “ 偏り ” が観察されたが,全般的には, “ 安全"あるいは安定した態度をとっていることを知った。

今回は,前年度と同じ対象について,“ 母親の子どもに対する態度"が 1 年後にどのように変化したかを調べてみたのでその結果を報告する。